

Topics 「安達峰一郎に学ぶ」

国際人業績の意義問う

生誕150周年、東京で来月シンポ

二つの世界大戦に挟まれた時代に国際連盟(本部スイス・ジュネーブ)を舞台に活躍し、常設国際司法裁判所(PCIJ)所長を務めた外交官、国際法学者の安達峰一郎(1869~1934年)。生誕150周年にあたり、第二次大戦の敗戦により忘れ去られてきた数々の業績を掘り起こし、その現代的意義を解明するシンポジウム「よみがえる安達峰一郎 世界が称賛した国際人に学んだ時代」(公益財団法人・安達峰一郎記念財団主催)が6月15日午後1時半から東京・四ツ谷のスクワール麹町で開催される。

国際語フランス語で貢献したのち、メキシコ、ベルギーの公使、大使などを経て1921年、発足後間もない国際連盟の日本代表に就任した。

安達は山形県山辺町の出身。山形師範学校中学校を経て1892年、帝国大学法科大学(現東京大学法学部)を卒業し外務省入り。日露戦争のポー

ツマス講和会議に当時の

安達は完璧な語学と法律論を駆使し、非白人国家唯一の常任理事国となった日本の立場を死守するとともに、戦後の欧州新設国家と少数民族を巡る多数の紛争の調停役を務め、国際協調の潮流を踏まえた類いまれな外交手腕を発揮して国際社会から絶賛された。

安達は30年秋、紛争の平和的(法的)解決をめざすPCIJ(オランダ・ハーグ)判事に最高票で初当選。翌年、所長に就任するが、満州(現中国東北部)国建国をはじめ、国際秩序に背を向ける日本軍部の暴走との板挟みとなって疲弊し、34年にオランダで病没。同国で国葬にされた。

安達は30年秋、紛争の平和的(法的)解決をめざすPCIJ(オランダ・ハーグ)判事に最高票で初当選。翌年、所長に就任するが、満州(現中国東北部)国建国をはじめ、国際秩序に背を向ける日本軍部の暴走との板挟みとなって疲弊し、34年にオランダで病没。同国で国葬にされた。

国内外に散在していた当時の安達の著述や講演を一冊にまとめた初の著作選『世界万国の平和を期して』(東京大学出版会)の刊行(今月末)を受けた今回のシンポジウムでは、同書編者の柳原正治・放送大教授が「安達峰一郎の思想と行動」と題して基調講演。また、学内に「安達峰一郎研究資料室」を設ける山形大の北川忠明教授、李楨之・岡山大教授らが個別報告を行う。

さらに、植木俊哉・東北大教授の司会による国際法学者らのパネル討論「国際社会の混迷と国際法の役割」を通じて、国際人・安達が身をもって示した行動の意義を問い、領土や領海問題を巡る紛争の解決にあたり、国際裁判がより重要性を帯びる現代への示唆を浮き彫りにする。

参加は無料だが、5月中に氏名・住所(所属)・連絡先を明記したファクス(03・3341・5063)かEメール(m.adachi@kg.dion.ne.jp)での申し込みが必要。パンフレットと申込用紙は安達峰一郎記念財団ホームページ(htt p://m-adachi.or.jp)。

お問い合わせは同財団(03・3341・5036)。



第9回国際連盟総会(1928年)の日本代表として主要国代表と会談する安達峰一郎。駐仏大使(当時) 安達峰一郎記念財団提供



著作選『世界万国の平和を期して』(東京大学出版会)